

## 吉田さんとチャーチル

昭和二十九年十月下旬、秋晴れに恵まれた羽田の空港には、政府の高官をはじめとして大勢の人々が秩序よく並んで、吉田首相の帰国を出迎えていた。間もなく日航機が大きい爆音と共に滑走路にすべり込んだ。タラップに降り立った吉田さんは、疲労の様子もなく血色のよい笑顔をほころばせつつ懐しの故国の土を踏まれた。どこからともなく「万歳」の嵐が湧いた。しかし顔又顔の歓迎者の群から、私は遂に一人の野党の領袖の顔をも発見することができなかったのである。思えば吉田さんの外遊ほど国内的に大きい抵抗を受けた外遊はなかった。しかし戦争によって他国に与えた有形無形の損害に対する慰藉と、戦後友邦から与えられた数々の援助に対する謝礼の旅に上ることが彼にとっては不動の悲願であった。嵐のような反対にも彼は頑として屈従しなかつた。野党やジャーナリズムは彼の外遊土産について何かと論評を加えたが、彼は土産などというさもないことは微塵も考えないで、只管祈りの心をこめてこの厳肅な国民的義務に参往したのである。

しかるにその吉田さんが帰国して懐しくも踏みしめた故国の土には、彼が期待したであろうような暖きぬくもりは一向に見られず、冷い逆風のみが吹きすさんでいた。反吉田勢力の結集は大きい潮流となつて渦巻いていた。

翌々日、政状報告のため大磯に赴いた池田幹事長に、吉田さんは引続き政権担当の可否について諮問された。池田さんは「おやりになるうと思えばやれないこともありませんが、最早御退陣の時期に来ているように思われます」と答えた。そこで吉田さんは自由党総裁を緒方副総理に譲り、首相の進退を党首脳に委ねて、引退の決意を固められ、愈々十二月七日六九年の永きに亘つた吉田内閣は、巨木の倒れ落ちるように政権の座から退いたのである。

一葉落ちて天下の秋を知るといふ。巨星地に墜ちて天地正に肅然たるの趣があつた。

欲のない人は強い。吉田さんには金銭欲がなかつた。在外加俸の乏しきを憂える外交官が、その退官と共に貧しからざる邸宅を東京に構える例が多い中に、吉田さんはその養家吉田家の財産を永い在外勤務の間に費消して省みなかつた。自由党の総裁を引受ける場合の唯一の条件は、一円の党費も心配できないということであつたと言つた。

吉田さんには名譽欲がなかつた。私は彼が暮夜ひそかに頭門を叩いたということを知り、驚いたことがない。外務大臣から総理へのコースは、彼自身にとつてはむしろ迷惑とさえ思われたことであ

ろう。唯彼の一意報国の至誠のみが、この煩勞に克く耐えさせたことであらうと思ふ。

吉田さんは数十人の大臣を任免して権勢をほしいままにしたことを非議する向がある。日夜苦楽を共にした閣僚を罷免するが如きことは人情に篤い吉田さんの克く耐えるところではなかつた。しかし国のためという一念に徹した彼は、克くこれを敢行して閣内の弛緩、停滞、腐敗を未然に排除して、空前にして絶後とも言ふべき内閣の永き生命力を生き抜かれたのである。若し吉田さんにして万一自分の身边にやましいところがあるとすれば、かかる果敢な行動には到底出られなかつたにちがひあるまいし、内閣もそう永くは続かなかつたにちがひない。

「反動吉田内閣打倒」の看板を、性こりもなく六年間も掲げつづけた政党があつた。吉田さんをワンマンとののしり、独裁者と誣い、遂には国賊のようにけなし続けた政客もあつた。しかし国のためという一念に徹して彼は、群犬巨象に吠える中であつて、泰然自若、その生命を国民の正当に示された総意に賭けて、民主政治の公義を守り抜かれたのである。

欲のない人は強い。金も欲しくない。名譽も望まない。命も惜しくない。その人は強い人であり始末に困る人である。吉田さんはそういう人である。強いて彼の欠点を求むれば、それは彼があまりにも強すぎ、あまりにも始末に困る人であることであらう。

## 賞 鑑 物 人

その吉田さんが、十二月七日、遂に桂冠されて、政権の座を去られたのである。ちょうどその

頃、全国のニューズ映画は英京ロンドンで開かれた老首相チャーチルの八十歳の誕生祝いの光景を報じていた。その席場には、野党たる労働党の党首アトリーから贈られたチャーチルの大きい肖像画が飾られてあつた。チャーチルはその画面に喜悦の瞳を注ぎつつ両手を大きく開いて、  
 "The remarkable example of modern arts" と嘆賞して、与野党はもとより全国民からやんやの喝采をうけていた。それにひきかえ、東京では、六年に亘る政権の荷を下した老首相吉田茂を乗せた一台の自動車、石をもて迫られるように、うすら寒い師走の街を通りぬけて大磯に急いでいたのである。

ところがその吉田さんは、かかる仕打に一言の不満を吐露することもなく又自らの成せる偉業に一言の弁疏を試みることもなく悠々自適の境涯をたのしまれている。しかもその吉田さんが去つた東京には、人を責むるに急であつて、自らの非に鈍感な人々が、人心に阿ねる乱舞を続けているのである。

一体、日本の政界はこれでよいのであろうか。それとも私のこの嘆息は、私独りのたわごとなのであろうか。(昭、三〇・一)